

A B r i e f N o t e N o . 1 9 5

発行日：2009.3.24

鹿児島県の歴史をたどる旅

吹田市 三輪長司

3月中旬に指宿、霧島の温泉に泊まる、二泊三日の鹿児島旅行をした。大阪 - 鹿児島の往復は航空機、現地での移動はレンタカーを使うツアーだ。趣味の撮影旅行を兼ねているから、バス・ツアーは使えずいつもレンタカー・ツアーになる。

今回の旅の撮影予定ポイントは、指宿の開聞岳と霧島山岳地帯のえびの高原や生駒高原などだったが、後半は天候に恵まれなかったため、霧島山岳地帯の撮影行程はすべて諦めざるを得ず、鹿児島の歴史をたどる予定外の旅に変化した。

1. 平地に乏しく統治困難な地方を島津氏が長年にわたり統治

鹿児島は地形が高知や和歌山に似ていて平地に乏しく山ばかりで、しかも急斜面の山腹がそのまま海に沈んでいる。海に面しているとはいえ、鹿児島湾(錦江湾)内には櫻島が聳え立っていて見るものに迫ってくる。火山も多く霧島、桜島、開聞岳と3つもあり、地質は溶岩性のシラス台地で黒々としているから、全体に男性的でゴツゴツとした印象が強い。これが鹿児島県人の気質に強い影響を与えているように思われる。

平地が少なくしかもシラス台地で水利が悪く水田に適さないから、陸稲や芋などの畑作にならざるを得ない。水田稲作中心の日本文化からすれば、辺境の地であり捨てられた地方だったのだろう。しかもこの地方の原住民は「隼人」といわれ反抗心が強く、統治者はその統治に苦勞した。

しかしこの地方の大名だった島津氏は、この困難な地方の経営を貫き通した。島津氏初代の忠久は、鎌倉幕府の源頼朝から、薩摩、大隅、日向の三ヶ国を与えられ、その後領地の増減はあったものの、650年の長期にわたって島津氏は薩摩、大隅を統治し続けた。初代の鎌倉時代から領地替えや没落もなく、明治まで続いた大大名は島津氏のみである。

統治困難な隼人を領内に抱えたため、島津氏の領内の統治は徹底し、平民と士族の人口比率が2.8人：1人(日本平均は16.5人：1人)という過剰な統治体制を敷いた。このため農民一揆などは起こらなかったが、士族も年貢だけではとても食えず、「外城制度」という士族も農作業に従事する屯田兵制度を取り入れていた。このため士族たちは領内の各地に散らばって居住した。これらが現在も武家屋敷群として県内の各地に残っている。

そのひとつが知覧武家屋敷群である。武家屋敷の庭は美しく殆どが見事な枯山水だった。禅宗の影響が強いようだ。ここは国の「伝統的建造物群保存地区」の名勝に指定され、日本の「道100選」にもなっている。生垣や家並みが統一されていて大変美しい景観だ。



《知覧武家屋敷群》

2．島津家別邸の「仙巖園」は櫻島が目前に眺められる美しい名園

鹿児島県の歴史をたどる第二の場所は、薩摩藩の藩主島津家の別邸だった「仙巖園」である。この別邸は鹿児島市の海岸の桜島が正面に眺められる場所に設けられ、庭園は 50,000 ㎡にも及ぶ広大なものである。この庭園から眺められる櫻島の美しさは素晴らしく、国の名勝に指定されている。歴史も古く今から 250 年前の 1658 年、19 代島津光久によって最初に別邸として構えられ、その後歴代藩主によって拡充が繰り返された。現存する建築群は建て替えられているが、中心の磯御殿は藩主の居宅としても使われたことがあり、琉球王の使者の迎賓館としても使われたことがある立派な建物だ。昨年 NHK が放映した大河ドラマ「篤姫」の舞台としてロケも行われたため、人気の高い観光スポットになっている。

薩摩は稲作に適さない僻地であったが、一方では大陸に近いことから外国との交易に恵まれた。明晰な藩主が歴代続いたこともあり、日本で最初に先進技術を次々取り入れてそれらを習得した。古くは種子島鉄砲、豊臣時代からの薩摩焼、カットガラスの切子、幕末時代は水力発電、大砲を作るための洋式反射炉、機械工場、紡績工場など、日本の近代化に貢献した。これらの事業も仙巖園の隣接地で行われた。現在資料として展示されている。



《仙巖園庭園》



《薩摩藩鑄造 150 ポンド砲》

3．特攻隊の発進基地だった「知覧」は日本の新しい聖地になった

歴史をたどる第三の場所は、太平洋戦争で特攻隊の発進基地となった「知覧」である。知覧は薩摩半島の中程のシラス台地上にある。上述の武家屋敷群の近くだ。

度々映画にも取り上げられている特攻隊は、戦況が厳しくなった終戦直前に編成された「特別攻撃隊」で、戦闘機に爆弾を抱えたまま敵の軍艦に肉弾で突撃する戦法であり、当時の米軍を震え上がらせた。この「知覧特攻基地」は太平洋戦争初期に、陸軍飛行学校として開校された。それが戦

争末期には、幼年飛行兵がそのまま特攻隊になったのである。

ここから散って逝った特攻隊員は 1036 柱である。ここには彼らの霊を弔うため神道形式と仏教形式の二種類の礼拝堂が並んで建てられ、全員の氏名が刻まれた霊碑、隊員のレリーフが彫り込まれた石灯籠が林立している。そばには平和会館が設けられ、館内には零戦の実機が展示され、散った隊員の写真と遺書がびっしりと並べられている。遺書は威勢のよいものから、涙を誘うものまで様々である。館内は写真撮影が禁止だった。

また敷地内のあちこちに平和を祈念する石碑が建てられ、鐘楼も設けられている。さらに特攻隊の生活を偲ばせるため、彼らが寝起きした「三角兵舎」も再現されている。

ここは予想していた以上に立派で美しく整備されている。年を追うごとに寄付が集まってくるため、様々な建立を続けているという。まさに新興宗教の本部の雰囲気だ。



《特攻隊石灯籠群》

ここには日本人というものが凝縮している感じがした。特攻隊は戦法としては愚かなものだったと言わざるを得ない。千人の若き命を失わせ千機の戦闘機も失った。敵の軍艦に命中したのはほんの僅かで、大半が撃ち落とされたり、途中で故障して不時着したという。

このような愚かな戦法を採用してしまった当時の軍部、特に陸軍の暴走と、それを許してしまった政治の無力さをいまさらながら痛感する。戦後は憲法の制約もあって軍部はおとなしいが、政治の弱さは相変わらずで今も変わっていない。

一方、国民のほうは現在に至るも、散って逝った特攻隊に寄せる想いは濃密である。

「彼らがかわいそうで本当にお気の毒だ。どんな気持ちで散って逝ったのか」と痛恨の言葉が繰り返される。ここにすれば情緒に溺れやすい日本人の感情が揺さぶられる。

しかし反面、積極的に国のために散って逝った勇気と尊さも強く讃えられている。

ここは日本人にとって、また右翼にとってはかけがえのない聖地となっている。

平和会館内で彼らの遺書を読んでいたとき、隣にいたおばさんが「今の若い人はここへ来てこれ

を読めばよい」とつぶやいていた。このおばさんのつぶやきは、親子の情や人の道から外れている若者への嘆きの言葉だろう。しかし別のコーナーでは、若い男性が涙を流しながら、食い入るように遺書を読んでいる姿も目撃した。

4．日本神話のルーツ「霧島神宮」で見た海上自衛隊の集団参拝

最後に歴史をたどる場所は、日本神話のルーツである「霧島神宮」である。霧島神宮は霧島連峰の一つである高千穂峰の南面中腹にある。主神は「天孫瓊杵尊(ニギハコト)」とされ、「当神宮は天照大神の神功を戴き、高千穂峯に天降り祖神として祀る」と謳われている。

日本の天皇家のルーツは、出雲系豪族と天孫系豪族が合体したものとされているが、天孫系が出雲系を吸収したため、天孫系が正統な天皇家のルーツとされている。しかし天孫系の発祥地を謳う場所が、ここと宮崎県高千穂町の高千穂神社と、九州に2ヶ所もある。神社同士は互いにルーツを主張して譲らない。しかし神社と神宮では神宮のほうが格上だから、恐らく霧島神宮が天孫系のルーツなのだろう。

この神宮では伊勢神宮と同様に、ご神体を祀る本殿を20年毎に建て替えている。この本殿の屋根葺きを使う銅板の寄進を募っていた。本殿や拝殿は朱と白で彩色されている。この参道の両側には、公爵島津忠重と彫られた石灯籠があった。明治になって天皇の親政が復活したため、島津家がこの神宮へ寄進したのだろう。石灯籠はこれ一対のみで、他の神社のように信者の名前が彫られた石灯籠が並んでいる光景はなかった。気位が高いようだ。



《霧島神宮》

境内で軍服姿の一団を見かけた。カーキ色の軍服でウイング模様の刺繍ある徽章を付けている。ウイング模様の下には「22F4」と刺繍されている。PILOT と書かれた徽章を付けている者もいた。どうやら航空自衛隊のようだ。国を守る者たちは、やはりここへお参りするのだろうと思った。彼らが乗る観光バスは地味な色彩で、ボディに何も書かれていない長崎ナンバーのバスだ

った。どうやら自衛隊所有のバスのような。しかし運転手はブルーの軍服を着ている。この色は海自の軍服の色だ。運転手だけどうして軍服の色が違うのか不思議に思った。海自所有のバスを運転手つきで空自が借りたのだろうか？

帰宅後インターネットで調べてみたら、22F4 という部隊番号は、長崎県大村にある旧長崎空港を基地にしている、海上自衛隊大村航空基地所属のヘリコプター航空部隊だった。

これで解った。海上自衛隊の制服は白だけれど、普段の戦闘服はブルーの軍服だ。航空自衛隊の制服はダークブルーだけれど、普段の戦闘服はカーキ色の軍服だから、海自の航空部隊の戦闘服は航空自衛隊の戦闘服に色に合わせているのだろう。(ちなみに陸自の制服はカーキ色だけれど、普段の戦闘服は独特の迷彩色の軍服だ)

ここまで調べて気付いたことがある。ソマリア沖のアラビア海に出没する海賊から、ここを通過する日本船舶を守るために、海上自衛隊の呉基地から護衛艦二艦が最近出航した。これにはヘリコプター航空部隊も乗っている。海上からだけでなくヘリコプターで哨戒すれば、海賊の発見が早だけでなく近づいて警告射撃も出来る。この海賊からの護衛任務は今後どれだけ続くか分からないが、長期になれば交代する必要がある。そうなれば大村の海自航空部隊は海自佐世保基地の護衛艦に搭乗して、海賊退治に参加するのだろう。

彼らの集団参拝は、これに備えた安全祈願と護国祈願だったに違いない。

この旅行は、結果的に鹿児島歴史をたどる旅になったけれど、四つの場所で目の当たりにしたものは、神代から現代まで続く「国の守りの真摯な努力」のリアルな光景だった。関西に住んでいると、このような場面にはあまり遭遇しないから、国防音痴になりやすい。

実は鹿児島を訪れる旅は今回が二度目で、青春時代に一度行っている。しかし殆ど印象に残っていない。若いときは世の中が見えていないし、遊びで終わっている。今回は天候不順で撮影旅行としては不十分だったけれど、実りの多い旅になったようだ。

以上